
閉鎖空間と悪罵少女

imaginary

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閉鎖空間と悪罵少女

【Nコード】

N4194W

【作者名】

imaginary

【あらすじ】

三十路の無職男が似非カウンセラーという自製の肩書きを背負って、少女に罵詈雑言を浴びせられる物語です。

といっても、これだけでは到底理解できないはずであり、そもそも作者にあらすじを理解してもらおうという気力が感じられないため、物語の真相を見るか見ないかは読者の判断にゆだねる。

第一話 椿が描かれていれば箱は高貴に見えるのか（前書き）

悩みに悩んで煩惱を重ね、結局は悩むのを辞退した結果、サブタイトルは各部で思った疑問を書くことにしました。

更新は毎週、日曜の午後にする。ただし、作者の飽きやすさと怠惰な性格を考慮するのであれば、決して信じてはいけない。

第一話 椿が描かれていれば箱は高貴に見えるのか

私は座して女性と睨み合っていた。食台を挟んだ向こうにいる女性には『旅館 空蘭荘』の若女将であり、本日は仕事でこの旅館へ赴いた。

「それにしても、ご立派な旅館で」

私は部屋を見渡しながら、女将の表情をちらほら盗み見た。

旅館は武美山のふもとに腰を据えてあり、駐車場もなければ看板の一つも見当たらない。それどころか旅館の周囲には覆いかぶさるように雑木林が形成され、遠目に見れば木造建築の旅館は巨大な猪が横たわっているようにも見えた。

しかし、外装は古色蒼然たる当旅館もひとたび足を踏み入れれば、その豪華な雰囲気息を呑むこと請け合いである。由緒ある空蘭荘は何代にも渡って受け継がれてきたようで、長年に亘り堆積されてきた神秘的な気配は数多の客人を暖衣飽食の楽園へと誘導したと思われる。

「そんなことは、どうでもいいんです」

女将は私の余談をあえなく無視すると、深刻な表情で食台に手をのせた。

「すみません。カウンセリングの件でしたね」

若女将はうなずいた。

私は心理カウンセラーをやっている。しかし、同時に立派な身分詐称をしている。身分詐称とは身分を偽ることである。つまり私はカウンセラーの資格を持っていない。ならびにカウンセラーの真髄を極めているわけでもなければ専門知識をかじっているわけでもない。まごうことなき一般人である。

なにゆえカウンセラーをやっているのかというと、所憚らず簡略化して言うのであれば貧困だったからである。お金に困り、就職できないことに腹を立てているところに天使とも悪魔とも判断付かない考えが浮かんだ。中学校のころに保健室で見かけたカウンセラーの先生、あれなら私にもできるではないかと。

そして、後日から『出張！ 心理カウンセラー』という胡散臭さにも限度のあるビラを配り、どうせ客などいないだろうなと下向きな予想をしていたものの、裏腹に『旅館 空蘭荘』の女将から電話が掛かってきたので、私は慌てて古本屋で『初心者 心理学』の書籍を購入した。そうして晴れて似非心理カウンセラーになったのである。

カウンセラーとは悩みを抱えた人の精神的自立を手助けする職業であるが、私自身が精神的自立を果たしていないことは、このさい棚に上げておく。

「ええ、実は娘の堇が一年前から部屋に閉じこもっているんです。多分、高校受験に落ちたことがショックだったのでしょうが。私としては、この旅館の後取りにしたいので、学歴はあまり関係ないのです。ですが、本人が何も言わないので」

女将は悲しそうに目を伏せた。

対する私は太平洋もかくやと思われる寛大な心で優しく女将の悲痛を受け止めていた振りを精一杯していた。我が師である『初心者心理学』には相談相手の気持ちを逆撫でするべからずと記されていたからだ。

しかし、精神的にはムンクの叫びのようになっていた。受験失敗、ひきこもり、無言少女。私には手の施しようがないではないか。今回はハードルが高すぎる。初めてなんだからもう少し簡単な相談から受け持ってみようじゃないか。

そう思った矢先に女将は食台の下から艶のある黒い箱を取り出した。蓋には椿が描かれていて、何とも高貴な箱に見えた。

「お礼金は差し上げます」

目を見張っている私の前で女将は蓋を取ってみせた。すると、中には札束が整えて置かれている。まるで大手電気家具店のレジの中のようにであった。

私が差し出された大金に息を呑んでいると、女将は続けた。

「ここに三百万があります。それに加え、この箱は地方の名人がこしらえたもので、売れば百万円の価値はあります」

食台の中央に箱が差し出された。私は宝を見つけた海賊のような顔をして箱に手を伸ばした。

しかし、直後に女将が箱を奥に引っ込めて蓋をした。

「でも、これは董を部屋から出すことができれば差し上げます」

私は取り繕うようにシャツのえりを調べると、紳士的に言い放った。

「董さんのお部屋はどこでしょっ？」

第二話 旅館の角部屋が身内の部屋というのはいりえるのか（前書き）

早くも二話の投稿です。

「仕事したぜ」的なオーラがただいま身の回りを渦巻いております。
ゆえに脱力しています。

この脱力が来週まで続いて「先週、二話投稿したから今週はいいか」
みたいなことにならないか作者はすでに危惧しています。

第二話 旅館の角部屋が身内の部屋というのはありえるのか

董さんの部屋は二階の角部屋であつた。長い廊下には均等間隔に電球が吊るしてあつたが、董さんの部屋の前だけは何だか薄暗い。引き戸には『すみれ』と紫色の文字で書かれた表札があり、そこから不気味な気配が漏れてきている。

女将さんは、「じゃあ、あとは任せますね」と言つてそそくさと立ち去つた。何か怖いものから逃げる様な素振りであつたので、なおさら不安が募つた。

「すみれさん？ 入つてもいいかな」

恐る恐る声を掛けてみるも、返答はない。引き戸の向こう側は物音ひとつなく、董なるひきこもりが居るのかということすら危ぶまれた。私は左手に持った『初心者 心理学』を強く握りしめた。

「カウンセリングに来たんだ。入るよ」

私は決心して、戸を開けた。

私の引きこもりに対する想像をくつがえすほど室内は綺麗で整つていた。部屋の中央に水玉のカーペットが敷いてあり、それを囲むようにして学習机や本棚やベッドがある。そのベッドに仰向けで横たわる董さんらしき人物を見つけた。

董さんは少女漫画を読んでいた。漫画を掴み天井に伸ばした腕は色白で、シーツの白さと同調しているようであつた。シーツの上に

は長い黒髪が乱れている。そして、何より彼女は年齢にとらわれない小柄な少女であった。

「君が董さんか」

「うるさい、黙れ」

歩み寄ろうと一歩踏み出したところで氷河期が訪れたのかと思った。

「……董さん？」

「入ってくるな、不法侵入者。豚小屋に帰れ」

私の繊細な心を容赦なく突き刺す悪罵は間違いなく彼女の口から漏れてきていた。彼女は平然とした顔で漫画を読み続けている。

私の顔は間もなく恐怖で歪み始めた。

話が違う。無言少女ではなかったのか。罵詈雑言少女だともいうのか。ならば、なおさら手のほどこしようなではないか。無理だ。辞表を提出する！

私はゆっくりと部屋から退出すると、韋駄天をも凌駕する勢いで廊下を駆け抜けた。そして、階段を下りて女将さんを見つけると、泣きつくように言った。

「話が違いますよ！ 罵倒されました」

しかし、女将はそっぽを向くと残念そうに顔をしかめた。

「当たり前です。ただのカウンセリングに三百万も払うわけありません。董はひきこもった途端に口調

が荒くなりました。身内だろうと初対面だろうと罵倒の雨です。今まで何度かカウンセリングを別の人に申し込みましたが、結果として芳しくありません。なので、もっと腕の立つ方をお呼びしようと、回を重ねるにつれて金額を上げていったのです」

罵倒に歪んだ泣き顔をさらしながら逃げ帰る由緒正しきカウンセラー達の幻影が脳裏に浮かび、私は騒然となった。回を重ねて三百万まで伸し上がったのであれば相当な数のカウンセラーが悪戦苦闘の結果、完膚なきまでに打ちのめされたのであろう。だとすれば一般人である私には処置しようがない。

「では、私はこれで……」

よくよく考えればカウンセリングで三百万などありえない。つかの間の幻想だったのだと、私は自身に言い聞かせた。そして、ここは早々と立ち去るべきだと察し、女将に背を向けて玄関の方へと足を伸ばした。

「あ、待ってください」

女将は逃がすものかと私の腕を掴んだ。しかし、私はかたくなに拒む。

「この件はなかったことに……」

董さんは十六歳であるというが容姿はまだ幼く見えてしまう。自分より遥か年下の少女に罵倒されるというのは屈辱の極みである。

三十路を過ぎんとしている貧困男が少女に提示された罵倒に頭を抱えて余生を過ごすことはない。それにつけ数多のプロフェッショナルなカウンセラーが挫けた難題を私がこなせるはずもない。逆にカウンセリングを受けたいぐらいである。

しかし、かたくなに首を横に振り続けた私の決意も、女将の次の台詞で見事に揺らいだ。

「もしも、董を連れ出してくれたら当旅館での一年間の宿泊をサービスにさせていただきます」

「一年間？」

「はい、何度お越しいただいても構いません。一年の間なら毎晩でも」

私は驚嘆の表情を隠せなかった。貧困である私にとって家賃というのは私が積み重ねた努力たる貯金を波のごとくさらっていく唾棄すべき存在である。そんな家賃の存在を一年間も忘れさせてくれるだけでなく、暖衣飽食も提供してくれるのだから、私の拒否反応も太刀打ちできない。いや、もはや太刀打ちせずに快く受け入れるのが合理的判断といえよう。

「つまり一年間は仮住まいにしても良いんですか？」

「自由にごどうぞ」

もはや退路は断たれた。

「いつてきます」

私は再び悪罵少女のいる部屋へ向かったのである。

第三話 将棋盤は学習機の引き出しに入れるものか（前書き）

サブタイトルだけはすらすらと浮かんでくる。

毎回のごとく疑問の耐えない小説ということである。

第三話 将棋盤は学習機の引き出しに入れるものか

引き戸を開けると、待ち構えていたかのような罵倒が顔面へ飛んできた。

「逃げたから女々しい奴と思ったけど蛙の面に水ね。阿呆だ阿呆」

董さんは先ほどと同じ格好でベッドに寝ていたが、少女漫画がゲームに変わっていた。相変わらず大人を一瞬で廃れさせる暴言を吐いておきながら表情は平然としている。もしかしたら、魔法で台詞が暴言になってしまう呪いをかけられたのではないかと勘違いしてしまうほど、彼女は可憐で高貴な気配を漂わせている。とても悪罵少女には見えない。

「董さん、年上に向かって悪口言うのは良くないよ」

「うるさい、黙れ」

二の句が次げず、私は口ごもるほかなかった。しかし、そう簡単に退出してたまるかと水玉のカーペットに座した。

「座るな。蛙の臭いがついたらどうするの。今だって鼻が曲がりそうなんだから」

私の繊細なハートに一本、また一本と罵倒の針が打ち込まれる。

私は身を翻し、董さんの死角になるように『初心者 心理学』を紐解いた。そこには『まずは、相手の気持ちに反発するのではなく受け入れることから始める。のちにじっくり善導すべし』と書かれ

ていた。

私は『初心者 心理学』をゆっくりと閉じると、董さんに向き直った。

「ははは、確かにそうだよねえ。蛙って臭いもんねえ」

「どうした、壊れたか。まあそれは最初からか。どちらにしろ、理解できたなら、とっとと出て行け。しかるのち豚小屋に帰れ」

「ははは、確かにそうだよねえ。豚小屋に帰らないとねえ」

「気持ち悪いぞ。不潔な奴は清潔な場所にいると頭おかしくなるみたいだな」

「ははは、確かにそうだよねえ。なるみたいだねえ」

私は、寛大に董さんの悪罵を受け止めながら思った。

この手法はいける。反発する気持ちがあると冗舌な董さんの罵倒に打ちのめされるが、反発でなく受け入れているのだと思い込めば、自分が寛大になった気がするではないか。私は大人で董さんは子供。私は紳士的に董さんの荒くなった気性をなだめているような気分になる。心に余裕ができる。

しかし、余裕があるのに涙が出てくる。

「少しだけで良いからさ。話を聞いておくれよ」

「嫌だ」

董さんはベッドから起き上がると、冷い視線で私を睨んだ。髪をかき上げて鬱陶しそうにあしらうと、そっぱを向いて窓の外を見ている。窓の枠にはほこりが堆積している。長く閉ざしたままのようであり、董さんが引きこもりだということを改めて実感した。

「高校受験に落ちたのがきっかけで引きこもってるんだと思ってるでしょ」

彼女は急に哀愁を漂わせると、洋服のボタンを指でいじりはじめた。どこかふて腐れたような表情であり、それ以上に罵倒じやなかったので私は妙に緊張した。

「それって、他に理由があるってこと？」

「さあね」

答えを濁した董さんは気だるそうに立ち上がると反対側の学習机に近寄った。引き出しを開けて中から木の板と木の箱を取り出した。

「暇だからちよつと付き合いなさいよ。蛙でも将棋ぐらいはできるでしょ？」

水玉カーペットの上に放られた木の板をよく見ると黒い網目の線が描かれている。将棋盤を挟んだ向こう側に座った彼女は手に持った木箱から恐ろしく手馴れた速度で盤上に駒を並べていった。それを見ながら私は「まあ、ルールは知っているけど」と戸惑いながら言った。

そして、彼女が駒を並べている間に私は死角を利用して『初心者

心理学』を再び紐解いた。するとそこにはこう書かれていた。『女性が少しでも愛想をよくすると、男はそれを好意として早とちりする傾向にあるが、それは愚行である。傲慢や嫉妬の種になるだけであるからご注意を』

私は読むべき書籍から逆に胸中を読まれた気がしたので驚いた。つまりは董さんの態度の急転もただの気まぐれにすぎないということである。私は危うく「いやあ、やっと心を開いてくれたんだねえ」などと言って墓穴を掘るところであつた。そんな不用意発言をすれば「二度と喋るな」などと言われかねない。

「蛙が先攻でいいぞ」

私は『初心者 心理学』を閉じると、董さんに向き直つた。

「では、お手柔らかに」

私は思考していた。もしも、董さんに将棋で勝てば彼女は私に対して一目置かざるを得ない。ここで一つ、英才と色男で名を馳せた私が大人の戦い方というものを見せてやろうではないか。そうすれば、暖衣飽食の楽園への道も近くなる。

私はそんな感じで戦いに挑んだ。

第四話 旅館の廊下では必然的に妄想するのであろうか（前書き）

この四話から、物語は大きく趣旨を逸れ、読者様の予想・思惑からも逸れ、小説としての倫理からも逸れ、作者の向上心・自負心・冒険心・好奇心などもことごとく逸れ、もはや読者の皆さんの関心も逸れていく模様です。

第四話 旅館の廊下では必然的に妄想するのであろうか

気がつくとも部屋の窓から見える穏やかな空は桃色になっていた。

「今度は飛車角落ちでやってやろうか？」

完膚なきまでにやつつけられた私は大人としての面目を保てなかったどころか、董さんにハンデをつけてもらうという恥をさらし、そのうえで負けてしまうという汚点を残した。

もう何度も彼女の相手をしたが、勝てる兆しが一向に現れない。

彼女はしなやかに駒を進めながら「カウンセリングに来た奴と毎回戦ってるんだ」と自慢げに言った。

「もうやめようよ。降参降参、勝てる気がしない」

私はこれ以上の恥辱は堪えられまいと勝負を投げ出して後ろに手を付いた。董さんは振り返って窓の外を確認すると「そうだな」と片言で呟いた。

「また、明日も来ていいかな」

窓から斜めに差し込んだ残照の光が彼女の白い頬を桃色に映えている。窓の外ではカラスが二匹並んで武美山の頂へ向かって飛んできているのが見えた。室内はやがて古めかしい静けさが訪れた。

私は立ち上がると董さんからの返答を待ったが、彼女は背伸びをしてベッドに潜り込んでいつてしまった。

「まあ、将棋をするためなら」

帰ろうとしたところで布団の中からはそぼそとくぐもった声が聞こえてきた。

「わかった」

私は部屋を後にした。

廊下にでた私は、そのまま階段を下りずに、廊下の窓から景色を眺めたり、電球の周りを飛び回る小バエを払ったりして、いつまでもうじうじと廊下をうろついた。

やがて、私は必然的に妄想で弄んだ。

もしも、董さんと意気投合を果たして部屋から連れ出すことができれば、三百万円とおよそ百万円の箱を頂戴し、さらに一年間は『旅館 空蘭荘』の一室に住まうことが承諾される。そうすれば事業を興すのもよし、旧友と遊び明かすのもよし、怠惰生活にうつつを抜かすのもよしである。いくらでも人生の挽回を狙える。今まさに私の目前には虹色に光り輝く絢爛な人生の行路が続いている。

私は廊下の一角で道化師のような卑猥な笑みを浮かべながら妄想を膨らませていたが、あまり膨らませすぎると現実と判断が利かなくなるのが妄想の瑕疵であり、私はまだ手中にあるわけでもない暖衣飽食の幻影を追って階段を上がった。

空蘭荘は一階に玄関帳場と食堂があり、二階と三階には個室がいくつか設備されている。もしも約束が履行されたなら私は三階へ居

住しようと考えていたのである。

三階も二階と変わらない構造であり、私は部屋の引き戸を一つ一つ開けてみて中の様子を確認していった。左右反転しているだけで何ら変わらない間取りが二部屋ずつ続いているが、私は夢見心地で朦朧としていたためか「この部屋はいいねえ」「ここは臭いなあ」「狭いぞ、ここは狭い」などと酒に酔ったように部屋を見回した。

しかし、そんな私の酔いも最奥の角部屋を見た途端に弾けるように消えた。どうやら角部屋は他の部屋と比べて広い構造になっているようであり、それは二階の董さんの部屋も同様であつたのだが、三階の部屋は董さんの部屋と似ていたのである。というか同様である。董さんの部屋そのもののようであつた。

引き戸の『すみれ』の文字、部屋の中央に置かれた水玉のカーペット、本棚、学習机、ベッド、二階の部屋と何ら変わらない部屋がそこにあつた。

私は一驚を喫すると、目をしばたたかせた。つまりは旅館内にまったく同じ内装の部屋が二つあるということである。しかし、よく眺めると窓の枠にほこりが堆積していない。どうやらこの部屋は掃除されているようであり、誰かが引きこもっているようすは見当たらない。

私は何がなんだか分からなくなり、一人であたふたと部屋を歩き交った。

ひとしきり慌てると落ち着きを取り戻して、先ほどの誇りの欠片もない無益な驚きように酷く不甲斐なさを感じた。そして、冷静な頭を駆使して改めて論理的に考えてみた。

しかし、結果を言ってしまうば、やっぱり訳が分からないのである。

突然の衝撃に膨張していた妄想に歯止めを掛けられた私は、臆病なチワワのように唸りながら三階をあとにした。

第五話 こんな無謀な賭け勝負はありえないかと（前書き）

これを見た読者は「むちゃくちゃな！ なんちゅうこっちゃ！」と叫ぶこと間違いない。私もそう叫びながら執筆した。

第五話 こんな無謀な賭け勝負はありえないかと

一階に下りると、洗濯物を抱えた女将が脇から躍り出た。

彼女は多忙だということを悟らせるように額に汗をにじませながら「どうでした？」と声をひそめて訊ねてきた。

「順調ですよ。罵倒も少なくなりましたし」

私は本心でそう言ったが、女将には見栄を張ったように聞こえたのか、「本当ですか？」と訝しげに睨んできた。

「本当ですよ。任せてください」

私は大胆に言い切った。これで不成功であれば私は粗忍者として空蘭荘の歴史に名を残すこととなるが、そのときは潔くうわべ飾りの男として余生を過ごせば言いだけの事であり、今の私には将来の汚名より現在の面目の方が大切であった。直結に言えば、やはり見栄を張ったのである。

「そこまでの自信があるのですしたら、私と賭け勝負をしませんか？」

女将は赤子をあやすように抱えた洗濯物を揺らすと、どこか取って食いそうな目付きで私を見た。

何だか先ほどとは態度が違うな、と違和感を覚えながらも私は「掛け勝負とは？」とびくびくしながら訊いた。すると、彼女は下唇を舐めてから誘惑するように言った。

「もしも、あなたが董を連れ出すことができたなら、私は当旅館の所有権を差し上げます。そのかわり、もしも連れ出すことができなかったらあなたの積金をください」

私は口をあんぐりと開いて驚いた。

「旅館を差し上げますって、手放すのですか？」

「はい、正直なところ、そろそろ穏やかな暮らしをしたいと思ってるんです。どこか景観の良いマンションを借りて董と二人で静かに過ごそうかと」

私は戸惑って言葉がでなかった。もしも上手くいけば一年間仮住まいにするどころか、新築一戸建ても夢ではないではない。私は空蘭荘の今まで積み上げられてきた名声と名誉のうえにただ乗っかるだけでいいのである。そうすれば暖衣飽食を目当てにやってきた客を適当にあしらひ、きっかり宿泊金を頂けばいいだけのこと。

本来ならば不成功となったときを考えて積金を惜しむのだろうが、そもそも私には失って惜しむほどの金額を貯金していない。

しかし、あまり即答をすると貪欲な奴だと思われそうなので「少し考えさせてください」と言っただけ。

「分かりました。お返事待ってます」

そう言って彼女はにこりと笑った。「もう、お帰りになられますか？」

私はうなずいた。

「ええ、そのつもりです。明日も訪問しますので」

「はい。私もこれから街で食材を買ってきます」

「大忙しですね、女将さん」

「そうですね。買い物は毎日しなくてはいけませんし、ここは街から離れていますからね。私は面倒くさがりなので、ぐだぐだとお買い物先延ばしにしないように毎日午後五時には街へ出掛けると決めているのです」

私は適当に相槌をしながら壁に掛けられてあった時計を見た。時刻は午後五時であり、ちょうど女将さんが買い物に出掛ける時間帯である。

私は邪魔にならないように一礼すると、そそくさと旅館からでた。

私は自宅へ向かいながら、頭の中を整理した。

私は似非カウンセラーとして董さんのカウンセリングを受け持った。しかし、董さんは由緒正しきカウンセラーですら固唾を呑んだ悪罵少女の極致であり、私も現在は彼女の罵倒射程範囲に身を置いている。成功すれば数々の獲得物が用意されており、私はその褒美を手にしたあとの煌びやかな人生の幻想から機動力を得ている。

董さんは自身へ賭けられた莫大な富のことなど知らないだろうし、私が彼女へ向ける愛想は全て「褒美のため」へと繋がるのであり、その点では少し董さんに申し訳が立たないが、それも大人の事情というものである。

私は悪徳商人のような笑みを浮かべると、軽やかな足取りで帰路を辿んだ。

第六話 自分が鼠になる夢とはこれいかに（前書き）

少しだけ文章の質を落とした。

しかし、読者の皆さん。早とちりしてはいけない。文章の質が落ちたのではなく落としたのである。作為的であり、これは戦略である。

なぜならば、次話である第七話はある種の見せ場であり、私は全身全霊を込めて執筆しようとしている。つまりは、この第六話は次話を引き立たせるための要である。ゆえに戦略的劣化を施したのである。

だから、勤続疲労がここに来て大目に出てきたというわけではない。決して、ない。

第六話 自分が鼠になる夢とはこれいかに

私の住む木造二階建てのアパートは見るに忍びないほど汚れている。白かったはずの外壁は黒ずんで陰鬱な気配が放出され、ここを通り掛かった野良犬や野良猫は何か憑かれたように排尿や排便をもたらず。冬が到来すれば建築ミスも甚だしい隙間風が私の身体に吹き荒び、孤独感をあおるのだ。

翌朝、私は悪夢にうなされて目覚めた。夢の中で私は鼠であり、後方から追走するのは鋭い爪牙を光らせた虎である。虎は走りながら咆哮をあげ、今にも飛び掛らんとしている。その怒りに歪んだ表情からは空腹を通り越した憎悪のようなものが感じられた。私が何をしたというのか。

見覚えのない一本道をひたすら逃げ追いついてたが、やがて前方右に私のアパートが現れた。私は急いで敷地を横切り、階段を上がつて自室へ駆け込んだ。私はこれで助かると安堵した。

しかし、よくよく考えればこのアパートの壁は極めて薄い造りであった。猛獣に突進されればひとまりもない。そう気付いた時には恐ろしく鋭利な爪が壁を突き破った。まさに私は袋の鼠であり、戸が爪楊枝にもならない木片へと化していくのを泡を食って見ていた。

そこで夢から目覚めたのである。私は号泣していた。

何か悪いことの前触れである気がしたが、いつまでも布団にこもるわけにもいかない。私は『初心者 心理学』を片手に家を出た。

外に出ると辺りには朝靄が立ち込めていて、新鮮な空気が私の肺に入り込んできた。体の芯に冷氣が取り巻く感覚があり、寝ぼけていた体内が勢いよく目覚めた。しかし、清々しさもそれほどに振り返ってみると、妖怪の住処のようなアパートが私を見下ろしている。むしろアパート自体が妖怪のようでもあった。

有終の美を飾り尽くし金的をいとめてやれば、お前みたいなアパートとはお別れだ。今まで楽しかったよ、せいぜい崩れないようにな。近所に迷惑だから。

私は心中でそう呟くと、大股で『旅館 空蘭荘』へと向かった。



空蘭荘に二時間ほど掛けて到着すると、女将が玄関で待ち構えていた。

「どうぞ、董はもう起きてます」

私は一礼すると、川に流されるように廊下を進み、階段を上がって董さんの部屋へ行った。

「董さん、来たよ」

「うるさい、朝なんだから静かにしろ。ぶつとばすよ」

戸越しから董さんの罵倒が飛んできた。しかし、私は恐怖することもなく、むしろ微笑んでいた。罵倒ではあるが、私の問いかけに答えてくれている。これは友好的な関係への一歩であろう。

「入ってもいいかな」

「少し待て、着替える」

戸の向こうからはベッドの軋む音が聞こえた。私は「わかった」と返事をする、身を翻して廊下の窓から景色を見た。

武美山も、そのふもとから流れる井江川も、その流れる先に腰を据える住宅街も、町全体が眠っている。遠くに見える浦島海岸には大きな漁船が波に揺られ、武美山からは鳥のさえずりが聞こえてきた。のどかな早朝に私は微笑むばかりである。

「いいぞ、蛙」

ペットを呼ぶような声が聞こえてきた。私は頬を叩いて気を引き締めながら引き戸を開けた。しかるのち、仰天した。

董さんは昨日と打って変わり、とても佳麗な姿であった。洋服はとてもお洒落だし、髪も寝癖がなく丁寧に撫で付けられていた。薄く化粧もしている。

私が見入っていると董さんは気恥ずかしそうにそっぽを向いて「一応客人だからな」と妙な言い訳をした。それでも私が見ていると「いい加減にしろ」と彼女は蹴る真似をした。

「将棋するかい？ 僕の負けは見えてるけどね」

私はカーペットに腰を下ろしながら、言った。すると、董さんは「しょうがないな」と唸ってから一人で納得したように頷いた。

「今の蛙は相手にならないからな。特訓だ」

董さんは誇らしげな顔をした。

第七話 どこが戦略的劣化だ！ 何も変わつとらん！（前書き）

作者は、ここに謝罪する。

理由は第六話の前書きと、第七話のサブタイトルを見てもらえば分かるはずである。

第七話 どこが戦略的劣化だ！ 何も変わつとらん！

私はそれから半日かけて将棋の真髄を教わった。駒の進め方、王の逃がし方、棋譜の読み方、相手の思考の読み方など、もはやカウンセリングの技術を軽々凌駕している気がする。ならびに、董さんも今日は機嫌が良い。罵倒は常時であるが、妙にスキンシップを強要したり、どこことなく私の私生活に探りを入れてきていた。

朝早くから訪問したのもあって、まだ午後五時である。私は帰宅しても特にすることもないので、もう少しだけここに居座ることにした。

「そういえば、お昼は食べてないけど、お腹すかない？」

私は敗北者として潔く将棋盤を片付けてから、ベッドに横たわる董さんに訊ねた。

ふと、窓の外に街のほうへ向かう女将さんが見えた。そういえば、午後五時は買出しに行くと言っていた事を思い出す。女将さんの後姿はどこか孤影悄然としていた。

「別に、いつもは夜ご飯だけ食べてるからな」

「え、一日一食？」

思わず女将さんから視線を外して董さんを見た。董さんはさも当然のような顔をしていて、起き上がると本棚の少女漫画に手を伸ばした。

「あんまりエネルギーを消費しないからだろ」

枕を腹に抱えて漫画のページをめくっている。どうやら幾度となく読み返した漫画のようで、ページをめくる速度がいやに速い。おそらく、引きこもっていた一年間で何度も読んでいるのであろう。

「漫画、何か買ってきてあげようか？」

「ほほう、私に貢ぐか。面白い」

それから、毎日のように漫画を買っていき、しだいに漫画では満足できなくなった董さんがぬいぐるみが欲しいだの、パソコンが欲しいだの、一軒家が欲しいだの、地球が欲しいだのと底知れぬ強欲さを発揮して、私に手がつけられなくなり、拳句の果てに着物まで剥ぎ取られ、路上に捨てられるというおぞましい未来が私の頭上を過ぎり、慌てて前言撤回をした。「意気地なしめ」と罵倒を頂戴したが、私はむしろ安堵した。

「そういえば、蛙の名前は？」

昨日にもあった、古めかしい静けさが再び訪れたような気がした。古代建築物の湿った内部であるような、森林の最奥に潜む天然温泉に浸かったような、静かな旋律が鳴り響く真夜中の音楽室であるような、そんな不思議な雰囲気であった。

窓辺に立った私の影が、部屋に伸びる。

私が名乗ろうと口を開いたところで、それを董さんが制止した。

「いや、蛙は蛙か。うん……そうだな」

そうおどけて言った董さんはなぜか悲しい顔をした。目が据わっていて、開いた少女漫画は急にページが動かなくなった。

「酷いな、もう」

私はどこか哀愁が漂った雰囲気を読み込めずに、後頭部を掻いて微笑んだ。

「蛙は、閉鎖花って知ってるか？」

打って変わったような態度の董さんは、私を見るなり申し訳無さそうな顔をした。そんな董さんの表情を見るのは初めてで戸惑ったが、目は背かずにした。

「いや、知らない」

「そう。ならいいんだ」

私は明確な理由を知らないが、彼女はただ引きこもりというだけではないような気がした。それと同時に三階にあるうり二つの部屋のことを思い出した。

「まあ、蛙のおかげで今日は暇つぶしになったよ。また、いつでも会いに来い」

「本当かい！ それは友好的な関係を結んだと思っていいのかな」

私は素直に嬉しかった。あまりカウンセラーらしいことはしていないが、逆にカウンセラーらしくないところが董さんの興味を引い

たのかもしれない。

「馬鹿か、友好という言葉は人間同士で使うものだ。お前は蛙なんだからな。忘れるな」

「そうだねえ。蛙だからねえ。分を弁えなきゃねえ」

私はそれとなく後退すると、死角を利用して『初心者 心理学』を紐解いた。

そこには『女性がスキンシップを強要したり、私生活を探ってきたり、普段は見せない一面を見せてきたら、あなたに好意があると考えてよい』と書かれてあった。

私は喜びのあまり数分に亘り歓声を堪えたり、にやにやが止まらない顔を指でほぐしたりしていた。気持ちが納まって振り返ると、董さんは眠っていた。そう言えば喜んでいる間に「眠い、寝る」と聴こえたような気がする。

とにかく、女性が寝息を立てる部屋にいつまでも居座るのは紳士として容認されない。私は『初心者 心理学』を床に置いて立ち上がると、董さんに毛布をかけてあげた。そして、そのままひっそりと部屋をあとにした。

第八話 はたして旅館の女将さんは仕事柄、契約書を持ち歩くのか

旅館を出ると、私は両手を空へ突き上げて伸びをした。それに作
用して出てきた涙を腕でぬぐって前方を見ると、そこには夕日に映
えた町が広がっている。旧態依然とした町並みであつたが、どこか
清々しく見えた。私はこの町がいつまでも変わらないことを願つた。

私は最高潮へと達した気分の高揚感を頼りに、ただでさえ二時間
かかる道のりをさらに遠回りした。芝生がえぐられ土が剥き出しに
なつた道を逸れ、こぢんまりとした雑木林を抜けて、井江川に突き
当たるまで歩いた。

井江川は武美山のふもとから東端の浦島海岸にかけて流れる大川
である。

土手を駆け上ってしばらく歩いた。

二人組みの男が川原に腰掛けて釣りをしていたが、難しい顔をし
ている。今さら釣りを始める時間帯でもないし、朝から粘っていた
のかもしれない。どうやら、結果は芳しくないようだった。私はそ
れを見て、妙に勝ち誇つた笑みを浮かべていた。

遠くには県立桜峰高等学校の校舎が角砂糖のように佇んで見える。
あそこは私の母校であり、思い出の宝庫とも言える。校内はあの頃
と変わらないままだろうか？ 先生達は今も頑張っているだろうか
？ などとぼんやり考えていると、むやみに高校の様子が見てみた
くなった。

みんなは今どうしてるかな？

職員室に挨拶へ行ってみようかとも考えたが、そう思った瞬間に思考に歯止めをかけた。似非カウンセラーなどという馬鹿馬鹿しい事を大真面目にやっている私が教師一同に面と向かえるはずがない。すると、どこか虚しい感情が込み上げてきた。

今頃、懐かしの同級生たちはどこかで一生懸命に働いているであろう。もしかすると、まだ勉学の道を精進している者もいるかもしれない。どちらにしろ、私のやっている事は同級生からすれば見るに忍びない憫然な所業である。

こうなったら、とことんやってやろう。泥にまみれた栄光でも掴み取ってやろう。

いい年して阿呆なことをやっている自分への虚しさを丸め込むように、私はむくつけき決心をした。

「あら、お帰りですか？」

ふと声が聞こえ、私は土手の下を見た。すると、そこには片手にポリ袋をぶら提げた女将さんが同様にこちらを見上げていたのである。

「あ、どうも。今帰ります」

私は頭を下げると、土手を降り立って女将さんに対峙した。女将さんが持ったポリ袋には食材がはちきれんばかりに詰め込まれていて、どこか億劫そうでありながらも女将さんは艶然としている。

「今日の董はどうでした？」

「また仲良くなれた気がします。罵倒も馴れてしまえばどうつてことないですよ」

「本当ですか？ あの子は人になついたりしないんですけれど」

女将さんからは私が見栄っ張りに見えるのかもしれないが、自ら訊ねておいて疑うことはやめていただきたい。もっと突き詰めれば、自ら依頼しておいて私の努力を訝しげな目で見ないで欲しい。私の自尊心への冒瀆である。

私が「本当ですよ」と苦笑いをしていると、夕日に雲がかぶさつて辺りが急に薄暗くなった。

しばらく黙って井江川のせせらぎを聴いていると、女将さんは昨日の事を持ち出した。

「そういえば、例の賭け勝負ですけど、考えてくれましたか？」

私の中で答えはとくに出ていたが、少しでも回答の言葉が喉につかえた。もしも、賭けに勝ったらふところに入ってくる富は莫大なものだが、逆にその富が莫大であるだけに困惑してしまいそうである。それに加え、負けてしまっても私には支障が少ない。「これが私の全財産です」と数万円を目の前に差し出しても、女将さんは不満を抱くのではないだろうか。

しかし、気付いたときには「いいですよ。やりましょう」と言っていた。

「意外と度胸があるのですね。少し惹かれましたわ」

女将さんは頬に手を当てて、いたずらに笑った。

「まあ、勝てる自信がありますからね」

私は好い気になって胸を張った。そんな私を見ながら女将さんは、ポリ袋と一緒に詰め込まれたカバンから紙とボールペンを取り出した。紙には何やら契約書と書かれている。

「では一応これをお願いしてもいいですか？ 不思議に思われるかもしれませんが、仕事柄こういったものはいつも持ち歩いているので」

私は掛け勝負に負けたほうが無償で旅館の所有権、または積み金を受け渡すという条件を記入して、サインをした。そして契約書を女将さんに返すと、額に汗をにじませた女将さんを見て私は慌てて言った。

「ああ、すみません。つい立ち話をしてしまいました。お荷物重いですのに迷惑なことを……」

「いえいえ、いいですよ」

私は一礼して女将さんと別れた。

女将さんの遠ざかる背中を見送って、土手道を外れて町角を曲がり、そこである種の清々しさを感じて両腕を突き伸ばした。そして、ふいに気付いた。

手に『初心者 心理学』が持たれていない。

私は顔の色を失って狼狽した。そして、浮き足立ちながらも冷静にどこで消えたのかを考えた。すると、空蘭荘の前でも背伸びをしたことを思い出す。あの時も手に『初心者 心理学』はなかった。

つまり、私は董さんの部屋に置いてきてしまったのである。

私は毛穴から冷たい汗が噴出すのを甚だ感じながら、来た道を行き返した。

第九話 遠回りしただけで夜になるわけが……（前書き）

この作者が怠惰な男であることは活動報告により知られているが、なぜそんな男が文体を荒くしてまでこんなにも更新を急ぐのか。

それは、早いところ完結させたいからである。

その一心で執筆している。つまり結局は怠惰なのである。

第九話 遠回りしただけで夜になるわけが……

私が再び空蘭荘に戻ってきた時には、オレンジ色の空は藍色へと移り変わっていた。踵を返したのはいいが、女将さんと鉢合わせるの是不味いと思って、さらに遠回りして空蘭荘に向かったのである。

雲に見え隠れする半月はまだ寂光であり、霞んで見えた。私は空蘭荘の近場にある雑木林に身を潜めて好機をうかがっていた。空蘭荘の出窓からは廊下の光りが漏れている。

私は困惑していた。

よくよく考えれば、董さんは引きこもりなのだから好機を待ったところで部屋に入れば必ず見つかってしまう。就寝したあとに忍び込んでも鍵は掛けられるだろうし、無理やり侵入すれば、それこそ犯罪である。

三十路を過ぎんとしている独身男が雑木林の木陰に隠れて、一人煩惱している姿はいかにも董さんの罵倒の対象になりそうである。

うじうじと決心が固まらないまま私は数分間におよび頭を抱えていた。

もしも、『初心者 心理学』が発見されてしまえば、私が似非力ウンセラーだということが露呈し、私が貧困であることが露呈し、それが女将さんに知れ渡れば積み金が極限に少ないことが露呈し、私がうわべ飾りで不憫な男だと露呈する。そうとなれば賭け勝負も流れる羽目になり、当然のこどく報酬の数々も私の前から逃げ去っ

てしまう。それだけは死守せねばなるまい。

私は夜の闇の中を滑るように横切った。

そういえば、この旅館には不思議な点がいくつが見受けられた。女将さん以外の労働者が見当たらないこと、私以外に旅館を出入りする客が見当たらないことなどである。

ゆえに玄関帳場に足を踏み入れた時、女将さんの気配がなかったので安堵した。彼女は何かと物陰から飛び出てくるので、それでも気は抜けなかったが、軋む音に顔を強張らせながら階段を上がった。

廊下の電球は点いているものの、部屋の明かりは一つも点灯していなかった。それは董さんの部屋も同様であり、私は董さんがすでに就寝したのではないかと所思した。

爪先で歩いて最奥を目指す。

明るくなったり暗くなったりと点滅を繰り返す古い電球の前を通り過ぎ、董さんの部屋の引き戸を掴んだ。

もしも、戸越の彼女がベッドでゲームでもしていようものなら、私の人生は終末を迎えることになりかねない。私は固唾を呑んだ。

ゆっくりと引き戸を開けて、真っ暗な部屋へと視線を凝らす。

部屋の床に引き戸の隙間から入った光りが伸びる。私は恐る恐る足を踏み入れた。

「董さん」

呼びかけるが返事はない。

しばらくすると目が冴えてきた。

そこで私は仰天したのである。

「嘘だ」

そこに董さんは居なかった。

引きこもっているはずの女性が忽然と部屋から消えている。実際は事情があつて抜け出したのかもしれないが、私は驚くほかなかった。

目を剥いて口をあんぐり開けていると、床の隅に放られた『初心者 心理学』を発見した。急いでそれを拾い上げる。どうやら見つかつていないようで、私は安堵した。

気持ちの整理が付かないが、目撃される前にこの旅館から脱出するのが最優先だと判断した私はそそくさと部屋をあとにした。

しかし、廊下を突き進んで階段を下りるとき、ふと思い立った。

三階の董さんの部屋はどうなっているのか。

私は気が付くと三階へと足を運んでいた。そんな自分に気が付いても、途中で引き返すことはしなかった。

三階につくと、私は瓜二つの董さんの部屋の灯りが点灯している

ことに気が付いた。耳を澄ませば、話し声も聞こえてくる。奇奇怪怪な出来事が立て続けに起こったためか、私はもはや驚きもしなかった。

ゆっくりと最奥へと歩み寄る。すると、しだいに声もはつきり聞こえてきた。

『だから、違うんだってば』

董さんの声。

『今までと同じよ。何も変わらないわ』

女将さんの声。

私はそのときから、この旅館は何かがおかしいと思い始めたのである。

第十話 作者名が果てなくテレビのあの人と似ている。

窓から見える住宅街は鉛の塊のような黒いシルエツトになり、空気が重々しい。町全体にあわく見える数多の電灯は、たくさんの怪物が眼球を光らせて私を見ているようであった。

三階の董さんの部屋からは、絶え間なく抗論のような女性の声が聞こえてくる。

『やめようよ、そんなこと』

悪罵少女として私の面目を粉々に粉碎した董さんとは思えない弱々しい声であった。しかし声の高さであったり、喋り方の癖などから紛れもなく董さんなのである。

『何言っているの。新しい生活が欲しいのでしょうか？』

女将さんの声は穏やかなままだったが、少しだけ圧迫感があった。

私は気付かれない限界まで部屋に忍び寄った。伸ばせば引き戸に手が届く距離で背を壁に預けた。

『私はここがいいの。私はお母さんの操り人形じゃないんだよ』

『お願いだから、今は私の言う事を聞いてちょうだい。夜だけなら泊まりに来ることも許すんだから』

少しずつ二人の声に苛立ちの表情が帯びてきた。私は聴いてはい

けないものを聴いているのではないかと思った。すると、恐ろしくなって今にも駆け出したくなった。しかし、足音を立てるわけにもいかず、爪先立ちでゆっくりと後退した。

『何が「許す」よ！ 自分の家で、自分の部屋で過ごすのが当たり前でしょ』

『ここはあなたの部屋じゃないと思うの！ 新しい居場所を素直に受け入れてちょうだい！』

私は慎重に壁をつたって一歩、また一歩と階段の方へ足を伸ばす。喉がひどく渴いていた。靴下の中が蒸れて指の隙間がはなはだ気持ち悪い。ボロアパートでも良いから早く布団に潜り込みたいと思った。

廊下の半分を過ぎた辺りで、距離が開いたためか声の内容は聞き取りづらくなったが、不意に董さんの怒声が響いた。

『それは、お母さんの都合でしょ！？ 何で私が加担する必要があるのよ！ もううんざり！ だいたい――』

しかし、途中で声が途切れた。何かに圧迫されて声が押し殺されたような印象を受けた。

何事かと耳を澄ませば、氣息奄々と喘ぐ董さんの声が聞こえた。

女将さんに首を絞められている。

『あなたは言うことを聞けばいいのよ！ どうせ私の苦しみなんか語ったところで理解できないんだから！』

助けに行くしかないと思って踏み出そうとしたが、その瞬間に喘ぎ声はなくなり、息を荒げた董さんの声が聞こえた。

『……ご……めんな……さい』

私はこれ以上聴いていると自分が発狂してしまうと危惧した。

『分かればいいの。じゃあ、私は部屋に戻るからね』

女将さんの声は急に穏やかさを取り戻した。足音が聞こえ、引き戸に手が掛けられて音を立てた。

私は驚いてあたふたと階段へ疾走した。足音は極限に押さえたが、もしかしたら気付かれたかもしれないと思った。しかし立ち止まる余裕はなく、そのまま階段を滑るように下って一階の玄関帳場に出た。一度『初心者 心理学』が手に持たれていることをすっかり確認して外に飛び出した。

窓から女将さんが監視しているのではないかと思い、旅館の外壁に身を隠して雑木林まで行ったが、振り返ったときにはどの出窓にも人影はなかった。

私の胸中にはまだ恐怖感が残っていて、何度も何度も董さんの喘ぎ声が頭に再生された。私はそれを取り払うように夜の町を駆け抜けてボロアパートを目指した。

自宅に帰ってから、あの恐怖体験の光景がまじまじと脳裏をかすめ、なかなか寝付けない。私は布団に包まりながら『初心者 心理学』を適当なページで開いて流し読みしてみた。

無意識に「ああ、確かに」「ほうほう」と頷けるような人間の心理が事細かに説明されている。私はいつの間にか読みふけていて、恐怖感もうまく紛らわせた。

これを執筆した人間はいかにも偉大なんだろうな、と思った。

表紙を見てみると作者名に『楽さとみ』と書かれてあった。

数分間に亘りそれを眺めていたが、いつの間にか眠っていた。

第十一話 はたして工事をした影響はあるのか

翌日、私は朝早く目覚めたが旅館へ足を運ぶべきか否か、なかなか決心が固まらなかった。昨晚のことが私の脳裏に焼きついていたからである。しかし、ここで逃げ出せば今までの努力が水泡に帰すと自分に言い聞かせて、正午を回った辺りで旅館へ足を運んだ。

「また来たのか」

そして、董さんの部屋に入るなり言われた台詞がそれであった。

ベッドの上で腹ばいに少女漫画をめくる董さんは、私に見向きもしない。

出窓の枠には将棋盤が立て掛けられ、遮光している。そのせいか薄暗い室内は悪鬼の住処のような雰囲気であった。昨日は「またいつでも会いに來い」とおおらかな態度であったにも関わらず、董さんは眼中に私を捉えることすらしない。

「あはは、将棋を教わりにきたよ」

董さんの一貫性のない態度に呆気をとられた私だが、滅入らずに窓辺に歩み寄り、将棋盤に手をかける。

「もう、将棋はしない」

あんぐり口を広げた私の前で董さんは背を向けるように寝返りをうった。

女心と秋の空とはよく言うが、先日まで私の将棋人生に幾重の詰みをもたらした少女の台詞ではない。態度が一変していることは明白である。化粧もしていない。

私が彼女の気を損ねるような不用意発言をしたのかと思い巡らせたが、そんなことはない。

「え、どうして？」

私が訊ねると董さんは即答した。

「飽きた」

しかし、どこか声が震えていて真意とは認めがたい。何だかその台詞の先に悲哀な感情が渦巻いているような感覚を受け、哀愁が漂った。

やがて室内が沈黙に埋められると、私は昨晚の事を思い出した。

闇に没した長い廊下の先に、淡い灯りが漏れている部屋がある。そこからは言い争う声が延々と聞こえ、私は耳を澄ませる。

——私はお母さんの操り人形じゃないんだよ。

——それはお母さんの都合でしょ。

——もう、うんざり。

「董さん、お母さんから引越しのこと聞いてる？」

「何のことだ？ 知らん」

董さんは漫画を閉じると、かたわらに放った。そして、掛け布団を手繰り寄せると、頭まで被りこんだ。

「眠い、出て行け」

当初ならば涙を浮かべて逃げ出した私だが、今回は足を釘で固定したかのように動こうとしなかった。何より董さんの台詞に気迫が感じられない。獅子をもおののくだろう罵倒の数々は一向に出てこない。

ふと、背後の学習机に目をやった。そこには、中学校の卒業アルバムや教科書が窮屈に肩を並べてほこりをかぶっている。私は、布団に包まる彼女に気を配りながらも卒業アルバムをそつと抜き取った。

何かに取り憑かれたように表紙に手を掛けると、適当なページを開いた。すると、そこは三年C組のクラス写真のページであった。董さんの顔を探すが、見当たらない。一ページ戻って三年B組を試みる。

そして、一律に並ぶ顔写真の中に水戸董の写真を発見した。

これを撮る前に何があったのかは検討もつかないが、董さんは笑っていた。私の知りうる董さんの表情を全て排しても、こんな笑顔は見当たらない。

私は、取り巻いていた哀愁が熱く滾るのを肌で感じた。董さんの

かくのごとき笑顔が高校受験により消滅してしまうものなのか。もつと、重大な何かを見落としているような気がしてならなかった。

「一つだけ、質問にだけ答えてくれないかな。そうしたら出て行くよ」

私は卒業アルバムを丁寧に学習棚に押し込むと、そう言った。

「ずっずっしいな」

董さんはそう言ったきり喋らなくなったが、私は構わず質問をした。

「初めて会った日に『高校受験に落ちたのがきつかけで引きこもってるんだと思ってるでしょ』って言ったよね。それって他に引きこもってる理由があるんじゃないかな」

動揺したのか、布団のなかでごそごそと董さんが身体を揺さぶった。

どこか遠方で鐘が鳴り、室内にやさしい反響を起こした。その鐘がやみ、余響も聴こえなくなると董さんはゆっくり答えた。

「私はそもそも高校受験をしてない」

しばらくして、そう返答が聞こえた。

第十二話 超人的な聴力とは何ぞや（前書き）

残り数話で終了するらしいです。

皆様どうかお付き合いくださいます。

第十二話 超人的な聴力とは何ぞや

「私はそもそも高校受験をしてない」

董さんは確かにそう言った。

一驚を喫する発言であったが、私は思いのほか平然とした態度であつた。

董さんが高校受験に落ちたという嘘をつく必要はないはずである。つまり、そんな価値の見出せない嘘を張ったのは、まぎれもない女将さんということになる。

ならば、女将さんは何のためにそんな嘘を吐いたのか。

董さんは起き上がると、布団をカーペットの上に蹴り置いて私に向き直った。彼女の首には薄っすら赤い痕が残っていて、脳裏に昨晚の情景が浮かんだ私は思わず目を背けた。

「私は閉鎖花だ」

董さんは悲壮感を漂わせてそう呟いた。

「閉鎖花って何の事？」

私は身を乗り出して聞き入った。

「董の花は早春に開花するけど、少し出遅れた花には開花せずにつ

ばみのままのものがあつた。それが閉鎖花だ。私は生まれる時期と場所を誤つたばかりに、開花できなかった」

董さんは悔しそうにうつむくと齒を喰いしばつた。

私はなんと声を掛けるべきか戸惑つた。

「受験に落ちたわけじゃないんなら、何で引きこもってるの？」

私はそう言つたきり、二の句が次げなかつた。

「私が引きこもりたくて狭苦しい部屋に一人でいると思うか!？」

董さんは突然、憤怒の形相で怒号を上げると、私に向かって少女漫画を投げつけてきた。私は「おい、やめろ」と言おうとしたが、言えなかつた。行き場の無かつた怒りを爆発させるような董さんの表情は、怒号を上げながらも切実で涙ぐんでいたのである。

董さんの口から出た言葉を正確に解釈するのであれば、董さんは引きこもりたくて引きこもっているわけじゃないとなる。

耳にして、初めて気付かされたきがした。

将棋をした時間、董さんは始終笑つていた。罵倒もあつたが彼女はとても楽しそうであつたはずである。

ああ、『初心者 心理学』は本物だな。と心底関心した。女性が少しでも愛想をよくすると、男はそれを好意として早とちりする傾向にあると書いてあつたが、私はその事実を知っておきながら、ここごとく勘違いしていたらしい。

なにも董さんは私に好意を抱いて笑っていたのではない。寂しかったのである。

董さんは孤独であつた。



董さんは、ほぞを固めたような顔を見ると、こう話した。

女将さんである水戸桜さんは高校を卒業すると、ある専門学校に大金を叩いて進学し、日々勉強に励んだ。しかし、その方面で彼女の才能が開花することはなく、遺憾ながらもそのまま卒業し、多額の借金を借りてこの旅館を造った。

しかし、客はしだいに減る一方で借金返済は経営では繕えなくなつた。当時の女将さんは夜が更けた頃になると発狂し、「金が欲しい、金が欲しい」と泣き叫んだという。それほどまでに切羽詰っていたようで、頭を抱え続けた女将さんは悩んだ末に多額を手にする計画を練った。

それが、心理カウンセラーを騙す計画である。

一年前から引きこもっているという董さんのカウンセリングを依頼し、賞金である三百万をちらつかせ、カウンセラーを躍起にさせる。そして、さらに董さんは女将さんの指示により心を開いていくフリをする。その間にも女将さんは獲得物を積み重ね、カウンセラーの欲を大いに高ぶらせる。すると、カウンセラーは自分のカウンセリングの腕に自惚れ、契約書にサインすることも惜しなくなる。

しかし、そこで女将さんは董さんにこう指示するのだ。

「契約したから、もう冷たくあしらってちょうだい」

それで、董さんは断固として部屋から出ることを拒否する。

すると、賭け勝負はカウンセラー側の失敗に終わり、積み金をことごとく持ち去られるというシステムである。

どうやら、董さんはそのシステムに嫌悪感を抱いていたようで、昨晚の言い争いもそれに起因しているようであった。



「私は嫌だった。こんな悪事を働かせて借金返済して、それで手に入れる新しい生活なんていらない」

董さんはそう言って話を締めくくった。

その時の私の心情を書けと言われれば、筆舌に尽くせない。

このまま行けば、私は積み金を持ち去られるという不安感。あの淑やかな女将さんに騙されていたのだという驚き。董さんの人生が女将さんの自分勝手な事情によりめちゃくちゃにされているという事態への怒り。

しかし、もっぱら訊ねないといけないことがあった。

「何で、僕に打ち明けてくれたのかな？」

董さんは眉を潜めると、静かに言った。

「それは、似非カウンセラーだから」

私はかみなりに打たれたような衝撃的な顔をすると、がくがくと身を震わせながら理由を問うた。

「な……なぜご存知で？」

「馬鹿な蛙だなあ。部屋に『初心者 心理学』なんて置いて帰られたら嫌でも気付くよ」

董さんは、ふつくら笑った。

しかし、私にはそれが悪鬼のように思え、恐怖に浸ることとなった。何か取って食われそうな雰囲気包まれた。しかし、私の繊細で超人的な聴力は瞬く間に彼女の台詞に『悪罵』が入っていることを察知した。

「馬鹿、蛙。良いねえ！　すごく良い！」

どうやら外は夕映え、窓に立て掛けられた将棋盤の輪郭はオレンジにかたどられた。そのわずかな光りが部屋を照らし、神秘的な雰囲気室内に滲んだ。

「げ！　ついにマゾヒストに目覚めたな蛙め！　吐き気がする！　帰れ！」

董さんは、吐露して重荷が取れたのか元気を取り戻していた。

「ははは、そうだよねえ。吐き気するよねえ」

「うるさい。蛙なんだから静かにしろ。ぶつとばすよ」

そう言っでどこか楽しそな董さんは少女漫画を無鉄砲に投げつけてきた。

全てがこの部屋に起因し、全てがこの部屋で持ち直されている。

しかし、私にはやるべきことが残されてあった。

女将さんを更正させなければ！

第十三話 自然発火的な狼藉とは表現に無理があるか……（前書き）

ついに工事が終わった。

いや、終わってしまったと言っべきか。

コピー＆ペーストを多用できた淡々な工事作業は極楽そのものであった。

「ああ、またむざむざキーボードを駆使せねばなるまいか」

小説書きになって早々三年弱、作者は今さらそんなことを嘆いている。

第十三話 自然発火的な狼藉とは表現に無理があるかと……

「女将さんは、どんな専門学校に通っていたのかな」

私が天井を見上げて訊ねると、董さんは「知らない。訊いても『どうせ、私の苦しみなんてアナタには解らない』って怒られる」とぶつぶつ言った。

女将さんの事を訊ねると董さんは機嫌が悪くなり、一触即発の危うい空気が漂った。どうやら、私が見てきた淑やかな女将さんは幻想になりつつある。きっと、彼女は世紀末覇者も恐慌をきたす腹黒さを隠しているに違いない。

董さんがあんまり不機嫌そうに私を睨むので、意識を逃がすように視線を泳がせた。すると、ちょうど時計が視界に写った。午後五時だということを知った。

「そろそろかな」

私は立ち上がると、千鳥足のごとく部屋を横断して窓辺の将棋盤を取った。すると、宝石箱を開けたかのようにオレンジの光りが窓から射し込み、部屋に反照した。

「何がそろそろなんだ」

董さんは眩しそうに目を細めると、ベッドから少しだけ這って縁に座った。

「ふふふ、ついに董さんに開花をもたらす不屈の計画が実行されるということだよ」

私は人差し指を空中に突き上げて、誇らしげに声を張った。

「なんのこっちゃ」

董さんは首をかしげて髪を揺らした。

私の決意は固かった。どうせ積み金など大方皆無であるので、数万渡して潔く上辺飾りの男で余生を過ごすのも悪くはなかった。しかし、それでは董さんは閉鎖空間に取り残されたまま女将さんに操られっぱなしである。

私は、董さんが私に胸中を吐露してくれた意図を理解しているつもりである。

「董さん、私とここを出よう」

煩悶するかよわき少女の心の内に歩み寄って上手いこと賭け勝負に勝ってやろうなどという所存はない。ひとえに常闇に囚われた彼女を助け出そうと思っただけである。ゆえに、旅館の所有権などを掌中に収める執念は秋の虚空へと散っていた。

董さんは目を剥いて驚き入った。開口して何か発言を試みようとするが、何も言葉が出てこないようであった。私はそれを看取して喜ぶべきか嘆くべきか悩んだ。なぜならば、董さんの絶句は嬉々としてのもものなのか、はたまた呆れからなのか、私には判断しかねたからだ。

夕日が武美山の山肌に身を沈め、夕映えたオレンジの部屋がすと暗くなった。

「正気か、蛙」

暫時あり、董さんは腹の底から絞り出すような声を上げた。顔はこちらに向いているが、視線は焦点が合っていなかった。

「董さんが承諾するなら。もっぱら正気だよ」

私は窓枠に堆積したほこりを指でなぞった。指先にほこりの塊が付着し、なぞった跡には白い木肌があらわになった。

私は窓を開け放つと、少し悪戯な笑みを董さんへ向けて続けた。

「君のような、自然発火的な狼藉に及ぶ小娘は、私だけでは手の施しようがないからね。世間の寛大な社会人たちに任せて然るべきなのだ。そのためには、この部屋を早急に出て行くべきだ。君は、閉鎖空間で立派に成長していたんだからね、もっと広い自由な世界に身を置くべきだと思うよ」

窓の外に向かって指先のほこりに息を吹きかけると、ほこりの塊は散り散りに外界へ流れ、広い秋の空へ浮かび、遠くに消えていった。それを見ながら私は「自由な世界に」と繰り返した。

振り返ると、董さんは気恥ずかしそうに肩をすくめていた。固く結んだ口元は、いまにも罵倒が飛び出るかのようで、また涙を堪えているようにも見て取れた。うつむき気味なので目元が前髪で隠れている。

不意に、その前髪の陰から水滴が頬を伝った。

「馬鹿な蛙だな、本当に」

董さんはそう呟いたきり、身を翻してベッドに伏した。

「どうせ、どこにもいけない。私は、あの人がどうしても怖い」

私は説諭しようとして、口をつぐんだ。

董さんは、一年間も閉鎖空間で己の意思も儘ならぬ生活であったのだ。全てが母親の指示通りに操られた行動。当然のこと母親への信頼や尊敬はなくなり、残るのは恐怖と嫌悪だけである。董さんは自分の存在意義に疑念も持たはずである。私は借金返済のためにこき使われている。もうお母さんは私に愛情の一切を向けていないのだろうか、と。

私なら、とつくに発狂している。

引きこもりだから、陰湿で扱いにくいとか不潔で低俗だとか、そんなことは似非カウンセラーなどをやっている私が所思できるものではなかったのだ。董さんは私なんかより果てなく立派であった。ゆえに助けるべきである。

支配を続ける者に恐怖を抱くのは当たり前であるが、私はそれでも食い下がった。

私の眼には、彼女が流した涙は漠然と嬉し涙に映ったからである。しかしその後、董さんが枕に埋めた顔を持ち上げることにはなかつ

た。

ただ、こうとだけ言った。

「午後五時だから、あの人は買い物に出掛けてる」

合点承知の助、そう言いおどけて、私は部屋を抜け出した。

第十四話 七人でページが埋まるとは、A4にあるまじき（前書き）

さあさあ、残り数話で完結ではないですか。
つきつきしますなあ。

第十四話 七人でページが埋まるとは、A4にあるまじき

木目の通った廊下を抜けて、みしみしと体重を支える階段を下り立った私は、女将さんの気配に意識を張り詰めながらゾンビゲームの舞台のような肅然とした雰囲気の中を奥へ奥へと突き進んだ。窮屈な廊下を肩をすばめて前進すると、先に橙色に長く暖簾が垂れていた。

暖簾を手で分けくぐると、そこは小規模な食堂であつた。前面白銀のオープンキッチンは綺麗に手入れされていて、ほのかに煌めいていた。食堂内には三つの長机が並べてあり、椅子が不規則に置かれてあつた。

三つのうちの真ん中にあたる机上にはテーブルクロスのように散らばった紙のうえに、紺色のファイルと電卓、A4サイズのノートや布地の筆箱などが無造作に置かれていた。まるで、誰かが作業をするうちに突然シャボン玉のごとく消えたような情景であつた。

武美山のふもとの方からカラスが鳴く声が聞こえ、どこかそれが卑劣な声音に感じた。うつうつしいというように、手汗を頬でぬぐう。

私は見えない何かに体を押されるようにして、長机のそばに寄り机上进行き込んだ。すると、テーブルクロスのように広がった紙の数々にはそれぞれ契約書という文字が一律して書かれてあつた。

足元を辿って背中まで小動物か何かが這い上がってくるような、そんな不気味な気持ちに身体を駆け、私は息を呑んだ。まだ、逃げ

てはいけな^いと自分に説得して、そのままA4のノート^をすくい上げた。

何か、ノートを持つ自分の腕が自身のものではないような気がして、得体の知れない感覚に囚われた。それでも構わず眼前でページを開くと、そこには見^に覚えのない他人の名前^が連ねてあった。

森田武、花見憂、田上真菜、小泉連二、徳井真理子、羽島悠輔、増田紀夫、その名前たちで一ページは埋められ、その名前たちの横には詳細不明の金額^が書かれてあった。

そして、次のページをめくるとそこには初めの行に名前^が一つだけあった。

それが私の名前であることに気がつき、私は仰天した。

しかし、金額は未だ記入されておらず私は「もしや」と、か細く呟き机上の電卓に手を伸ばした。力強くキーを叩き打ち、一ページ目の金額を合算した。最後の金額を加算し終えると、その合計はちようど三百万だった。

初め女将さんに提示された御礼金の額と同じである。あの椿の箱に入れられた多額の札束はまさか。そう思い、硬直した。

女将さんの目論見はすでに董さんから教えてもらったが、曖昧だったその非現実的な面が、ついに実態になりつつあると、底知れぬ恐怖^が呼び起きた。肌^がぴりぴりと痛み、どくどくと血流^が音を立てた。

「あら？ カウンセラーさん、そこで何をしているのかしら」

「わ、わわ！」

無意識のうちに背後から声が聞こえ、私は驚きのあまり振り返ることもままならず足を滑らせ床に転じた。その拍子に長机が私の身体に押しのけられ、ぎざぎざと音を立て床を引っ掻いた。そのせいか机上から紺色のファイルが落ちて床で開いた。

開いたページには写真が挟み込まれていて、その中には白衣を着た若かりし頃の女将さんの姿があった。友人数名と肩を並べて、どこかの公園の噴水前でポーズをとっている。今や後ろで束ねた長髪は風になびいて茶色に映えていた。

「さあて、どうしてくれましょうか」

声に呼ばれてそちらを向くと、写真の中の笑顔とは、ある種違った笑みを浮かべる女将さんが立っていた。

「あ、違っんですこれは——」

私は慌てて身を立て直すと、繕うように声を荒げた。しかし、言いよどむと一人で頷き「いや、違いますか」と呟いた。

暫時、食堂にはしつこいカラスの鳴き声だけが響いた。

「もう、かくのごとき所業は改めるべきです」

私は手に持たれたA4のノートを突きつけた。

「董さんの悲痛を代行し、あなたを善導します！」

むくつと立ち上がった私の眼前で、女将さんはむすつと笑った。

第十五話 市場にメリケンサック……!? (前書き)

次で最終話となる予定である。

ここまで辿りついた読者の皆様。かくのごとき駄文の掲載を許した管理者様。雨にも負けず、風にも負けず、雪にも、夏の暑さにも負けなかったパソコン。そして、それらにことごとく負けながらも執筆した私。

おつかれさま。

第十五話 市場にメリケンサック……!?

女将さんはこの期に及んでも優美な笑みを崩さず、語調は相変わらず和らいでいた。腹をくくった私にゆっくり歩み寄ると、急にかがみこんで紺色のファイルを手で拾った。

「女将さん、あなたは早急に董さんへの束縛を解くべきだ」

私は力いっぱい説諭するが、女将さんは耳栓でもしているかのごとく気に留めていない。

武美山の木々の間を抜けてきた秋風のかたまりが、ふもとに滑り落ちて旅館にぶつかった。旅館の側面に添うように風が吹き荒び、窓ががたがたと音を立てた。窓に隙間があつたのか、隙間風が食堂に侵入して黄色い遮光カーテンを天井まであおった。ぴゅうと笛を吹いたような音が耳に響く。

机上に散らばっていた契約書の数々は風に舞った。その光景はあたかも公園に窮屈に肩を寄せる数多のハトが何かに驚いていつせいに飛び立ったかのようなだった。

やがて、契約書が床に舞い落ちると、女将さんは口を開いた。

「残念ね。せつかくうまくいったのに、董が計画を喋ったのね？」

「そうです。でも董さんの選択は正しいと思います」

女将さんは紺色のファイルを開いて視線を下に落とすと、ため息をついて「それで、私を改心させようってわけね」と呟いた。

されど私が黙り込んでいると、オルゴールのように淑やかな声で長々と喋りだした。

「あの子にも困ったものだわね。昨晚も説得しておいたのに……。でも、あなたもどんな手を使ったのかしら？　今までも計画に反抗することはあつたけど、計画内容を漏らすことなんてなかったはずなんだけど」

女将さんは椅子を引いて腰を下ろすと、紺色のファイルを懷かしそうな目で見下ろした。

私は憤激を要した。この人はまるで罪悪感がないのだと頭を沸騰したやかんのようにぶるぶる震わせた。ファイルのページ静かにめくる女将さんの表情からは、自分の娘を借金返済の道具としても一切の気を回さないように感じた。

「あんたねえ！　いい加減にするべきだ！」

とうとう我慢ならなくなった私は、A4のノートを長机に叩きつけると、大股で彼女に歩み寄った。

「あらあら、情けない男ね。どうせ積み金を取られるのがいやで躍起になっているんでしょ？　でも、契約から逃れようったってそうはいかないわ」

彼女はそう言うと、「もう出てきていいわよ」と暖簾に向かつて声を掛けた。すると、肩幅の広い黒スーツの男ら二人がずかずかと食堂に侵入してきた。あまりにも体格が大きいので世界でも有数の二足歩行する熊かと思った。片方はワックスで固めた髪にサングラ

スをかけていて、もう一人は深いしわのある大樹の表面のような顔をしていて、豪華な指輪をたくさんはめていた。

私が固唾を呑んでいると、彼女はおぞましいほど不気味な笑みを見せて、手の甲を返すと男達を紹介した。

「この人たちは、野高組の知り合いだね。毎回カウンセラーの書いた契約書を譲渡しているのよ」

野高組と言えば浅木町の裏世界を取り仕切る暴力団組織であった。彼らが「大根はまずい」と裏で囁くとたちまち市場から大根が消え失せ、はたまた「メリケンサック最高」と阿呆なことを言う市場に大量のメリケンサックが陳列したという。その影響力はいずれから湧き出るものなのか定かでないが、浅木町の黒い歯車とよばれた野高組の幹部は未だ健在という。

その警察すらおののくと言われる野高組の二人はふところから一枚の紙を取り出すと、私に突きつけた。

「これは、おまえが書いた契約書だ。賭けに負ければどんな手段を駆使してでも金はいただくから、覚悟しておけ」

私は急な展開を呑み込めずに彼女と野高組の男らを交互に見た。彼女は私が恐慌をきたしたのだと思い、うふふと声を殺すようにして笑った。「馬鹿な男で良かったわ」

しかし、幾重に董さんの強烈な罵倒に身を打たれた私がそんな簡単に精神を屈するわけがない。ゆえに、かくのごとくキレのない罵倒は綿菓子で殴りつけたほどにしか効果はない。むしろカモン罵倒。

私は拳を固く握ると、偉そうに驕り高ぶっている野高組の二人に言い放った。

「賭けなど私の負けで結構！ 不況の波にことごとく浚われるような小さき積み金などくれてやるわ！ むしろ無くなったほうがせいせいする！」

さすがの野高組も私の踏ん返り返った態度にはたじろぎ、「頭おかしくなったのか」「発狂したか？」と顔を見合わせた。

「じゃあ、賭けは私の勝ちね」

女将さんは私が喚くのをやめると、妙に勝ち誇った表情でそう言った。

私は、あえなく無視すると、女将さんにも言い放った。

「女将さん！ 借金ならば私が肩代わりする！ 一生賭けてでも返済する！ だからこんな所業からは足を洗ってくれ！」

私は半ば言い過ぎたか、とさっそく後悔しながらも説得を続けた。「そして、董さんを解放してほしい！」

しかし、私は久々に自分の度胸を感じた。

第十六話 さ、最終回でない！ 何たることか！（前書き）

サブタイトルを御覧になったであろうか、読者様。

このうえなく屈辱的なことだが、尺の問題でにわかには最終回が一步身を引いたという。何たることか！ 作者よどうなっている！

私はいつになったら休めるのだ！

第十六話 さ、最終回でない！ 何たることか！

空は漆黒を混ぜたような紺色を帯び、窓からは綿のように散りばめられた薄い雲が見えた。かすかに星が煌いている。食堂は抗うこともなく夕闇に覆われていった。

女将さんは私の赤裸々な発言に一驚を喫し、紺色のファイルをゆっくりと閉じた。

「借金を肩代わり？」

私は強くうなずいた。

「ええ！ 金額の多寡は知りませんが、必ず返済してみせます！」

貧困であるからといって、自分はカウンセラーだと恥じもせず嘯き、拳句のはてに数々の所得物に目をくらませ非道な所業に手を染めることも厭わなかった己の屈折した精神が醜くてたまらない。

よくよく考えれば、私が貧困になった理由など、「そりゃあ、自業自得だ」と万人が首肯する内容である。中学生の頃にろくに勉強もしていかないせに高校に通いたいと人生の時間稼ぎを図り、そのくせ高校でもやっぱり勉学に励むことはなく、親ばかりに迷惑をかけ、自分は何も苦勞を担わずに「世は狂ってる」だの「みんな馬鹿だ」だの世間の批評ばかりしていた。そうするうちに友人は波がひくように私の前から去り、いつの間にか孤独になっていた。すると、学校がただの苦になって次は親に高校をやめたいと頼んだ。すると、今まで熱心に私を養っていた両親はほろほろと涙を流し「もううんざり」と肩を落とした。その影響で何とか卒業はしたものの、両親

との間にできた溝がこの先ずっと越えられないものになった気がして、私は逃げるように一人暮らしを始めた。

しかし、そんな私がアルバイトなど長続きするわけもなく、そうして、貧困へと成り下がっていったのである。もはや、己の胸中には誠実とか純粹などの綺麗な言葉の数々は在りえないと感じられた。ゆえに似非カウンセラーだの意味の分からない所業にはしり、不当だろうと難癖だろうと金を掌中に収めようとしていた。それが愚行であつたと気付かせてくれたのは言うまでもなく董さんであつた。

彼女は不憫な境遇でありながらも必死であつた。学校に行きたくても行けず、他人との交流を遮断され、嫌悪を募らせながらも女将さんの意のままに操られていた。しかし、逆巻く波に飲まれながらも懸命に抗っていた。私なんかより、私のような常人にも値しない屈折した人間より、遥かに立派な女性であつたのだ。

そんな彼女の人生が、今ここに掛かっているのだ。もはや、私の損害など喫し得ない。というか喫して改心して然るべきかもしれない。

「根性はあるみたいねえ」

女将さんは片眉だけ吊り上げて、少しだけ笑うのをやめた。

野高組の二人はすっかり蚊帳の外となり、浅木町の裏世界を取り仕切る暴力団組織にはとうてい見えないような肩身狭い表情をしていた。

女将さんは借金返済の手段により董さんを強制的に籠城させてい

ることになる。ならば、その返済を私が担えばその必要は微塵もなくなるはずである。もはや、親子の間にできた壁は、この先ずっと乗り越えることができないかもしれないが、このまま恨み恨まれの関係でいるよりはずっと良好だと思える。

これが、最善の策であるはずだった。

しかし、女将さんは突然天井を仰ぎ高らかに笑い出すと、次のように言い放った。

「でも、本当に馬鹿な男ねえ！ 私の借金なんてとくに払いきってるわ。私がこの計画を練った理由がまだ解らないのかしら？」

私は顔をしかめる他なかった。すると、彼女は紺色のファイルを開いて例の写真を私にかざした。相も変わらず噴水前の女将さんと水戸桜さんが写っている。

「この計画はね。カウンセラーを騙すことに意義があるのよ」



写真は、某心理学専門学校のキャンパス内であるという。高校を卒業した水戸桜さん（女将さん）が大金を叩いてまで専攻したのは心理学であった。水戸桜さんは毎日のように勉学に励み、心理学の真髄を極めつくしたという。

しかし、いくら正道を精進しようが、就きたかったカウンセラーの仕事は向いていなかった。知識ばかりが増えても、実践授業では全く役にたたなかった。拳句に教授には「この道は君には向いていないよ」と言われ、それが水戸桜さんにとっての心的痛手になった。

そうして芳しい結果もでないまま卒業を迎え、水戸桜さんは旅館を営業することに決めた。けれども、立地の悪さもあり客足は毎々途絶え気味で、若くして婚姻した夫ともすぐに別れた。のちに懐妊が認められ、翌年に董さんを出産した。

一児の母として、ますます稼ぐ必要があつたのだが、なかなかカウンセラーへの執念を取り払えなかった。借金もあり、夜な夜な煩惱するうちに、カウンセラーへの執念はカウンセラーへの嫉妬に移ろい、やがてカウンセラーへの恨みに変わっていった。

そもそも胸中では納得していなかったという。心理学の知識は誰よりも取得しているつもりであつたし、そんな自分を差し置いて暗躍している数多のカウンセラーへ思いを馳せると、はなはだ怒りがこみ上げたという。

そして、いつの間にかカウンセラーを騙す計画を練つたのであつた。

そうして、カウンセラーに一杯喰わせれば自分のほうが勝っている、レベルが上だと証明できるし、借金の返済にも繋がった。そうすると、董さんを中学校にも通学させずに表ざたには不登校を装い、計画に加担させた。

賭けに敗北したカウンセラーたちが「不平だ！ 品性を疑うぞ！ 断固として契約は破綻だ！」と抗議するが、野高組を背後に位置させて、それも黙らせた。



つまり、私には手の施しようがないほどに、女将さんの精神も屈折していた。

第十七話 私ってどうしてこんなに計画性がないんだろう？（前書き）

サブタイトルが物語る通り、もはや疑問は己の性質へ向けられる羽目になった。理由はまごうことなく一つ。

最終回がやってこない。

十五話での哀愁を漂わせながらの決め台詞が馬鹿みたいではないか。

第十七話 私ってどうしてこんなに計画性がないんだろう？

女将さんは自らの過去を自嘲気味に吐露して、「だから、あなたが似非カウンセラーだろうが初心者カウンセラーだろうが、私には関係ないわ。とにかく私の勝ちなもの」と狐のように笑った。

私はかみなりに打たれたような顔をした。

「な、なぜ似非カウンセラーだとかご存知で？」

まさか、董さんが内通しているわけではあるまいと青筋立てて言った。

「馬鹿ねえ。部屋に『初心者 心理学』なんて置いて帰ったら嫌でも気付くわよ」



董さんの部屋はもとも三階の角部屋であつたが、計画を実行するにつけ、よりカウンセラーを欺くために引きこもりだと看取させる舞台を設備する必要があつた。ゆえに、二階に瓜二つの部屋を模倣し、さまざま中古家具を探し求め——とはいえ三階の部屋のものに酷似している——古臭い家具を揃えた。つまり、かの部屋で幾重に感じた古めかしい雰囲気とは、再び使用されることとなった中古家具の放つ古めかしいオーラからきているものだと思われる。

そして、カウンセラーが訪れる時分になれば董さんを二階に移動させ、カウンセラーが帰宅したあとは普段の三階の部屋に戻すという手段を駆使していたという。

そして、私が帰宅した二階の部屋で女将さんは『初心者 心理学』を見た。

当時は借金返済もままならなかったせに、人工的にほこりまで堆積させ、なんと道を逸れた金の使い方だと私は呆れる他なかったが、女将さんのカウンセラーに対する執念とは私が推し量りえぬものだと感じられた。



「ほこりっぱい部屋で寝泊りするのは董が嫌がるし、どうせなら二階に専用の部屋をつくってしまおうと思ったのよ」

女将さんはそう言って、首を斜めにして微笑んだ。

食堂のガラス戸は外界の闇に黒々としていて、目を凝らすと峠からの町の情景が眺められた。砕いた飴玉を振りまいたような街の電燈が、両脇の木々に切り取られて見えている。

「言っておくけど、野高組に契約書を譲渡した時点でああなたの人生は闇に吞まれたと同じよ。契約内容の改ざん、高金利、脅迫、拷問。あなたは余生を野高組の魔手に震えながら過ごすしかないわよ」

私は絹ごし豆腐のように白々として、ぼんやり女将さんを見つめるほかなかった。すると、女将さんは私のふところを指差すと、目を据えて言った。

「そもそも、その『初心者 心理学』ってね。私が書いた物よ」

「えっ」

私は『初心者 心理学』を取り出すと、そんな馬鹿なと表紙を凝視した。

「『楽さとみ』っていうペンネームあるでしょ。それ逆さにして見てよ」

私は言われるがまま逆さに見た。

らくさとみ。

みとさくら。

私は驚いて目をしばたたかせた。

確かに水戸桜である。

私が仰天していると、女将さんは回想するように視線をそらした。

「カウンセラーの夢は駄目だったけど、知識だけは抜群に蓄積してたから、本は売れたわねえ」

私には理解し得ない不可解な感情が込み上げてくるのが感じられた。私が金目当てで来訪した旅館の女将は、はなっから私を騙していて、それで担当した董さんは元々は女将さんに背後から操縦されていて、必死に頼っていた『初心者 心理学』も女将さんが執筆したもの。

全てが女将さんの手の平で行われていた事であり、私はそこでひ

たむきに小さく無意味な八面六臂をしていたことになる。そもそも、女将さんは借金返済ではなく、その『手の平で憎きカウンセラーを踊らせ、自分の方が長けていることを証明する』が目的であった。私はあえなくそれに捕らわれた。

つまり、私は始終に亘り踊らされ、こうなることを余儀なくされていたことになる。そうすると、董さんとした将棋や、鼻歌を吹かした帰り道や、高校生活よりも充実していると感じた高揚、董さんからの罵詈雑言コレクションまで、すべてが嘘であったように思えた。私には、それが無性に悲しく感じた。

「あんたらの思惑通りにはならんぞ。断固として、だ！」

私は憤って足元の風船を割るみたいに、地面を踏み鳴らした。

「あらあら、ですってよ。野高組のお二人さん」

女将さんは、もはやこうなる事まで心理操作したかのように得意げな顔で、蚊帳の外であった野高組の二人に声を掛けた。すると、きょとんとしていた二人は魂が戻ってきたかのようにハッとすると、私に近寄った。

突如、大樹の表面のような顔をした男が、豪華な指輪を装着した拳を振りかぶり、私の顔を思い切り殴った。私は背後の長机ごと倒されると、力なく床に尻をついた。じんと脈打った頬を押さえて、立ちはだかる野高組の男らを震えながら見上げた。

私のつぶらな瞳を技巧した上目遣い攻撃をしかければ、そのかわゆい風貌にどんな人間も同性異性の分け隔たりなくメロメロになるものだから、「おまえが犯罪に手を染めても、その上目遣い攻撃をす

れば裁判官は直後に『無罪』を掲げるだろう」とまで心の中で賞された攻撃も、もはや野高組への効果は見られない。

次は俺の番だとも言うかのようにサングラスの方が前に出て、私の胸ぐらを掴み無理やり立たせると、さらに拳を振りかぶった。

私は殴られる直前に女将さんのほうを見た。しかし、彼女は「そこまでしなくても」というよりは「もっとやれ、もっともっと」というような顔をしていた。もう、かの優しき女将さんは秋の虚空へ散ったのだと思われた。

「悲しい人だ」

私は最後にそう呟くと、近来に訪れる痛みの衝撃にそなえるため目をつぶった。

「やめなさい！」

突如、部屋に大音声が響き、何かと目を開くと、眼前に直撃ぎりぎりの宙でとまった拳があり、その拳の背景に仁王立ちする董さんがいた。

第十七話 私ってどうしてこんなに計画性がないんだろう？（後書き）

そろそろ完結しそうなので、未だに不鮮明な点や疑問などがありましたら、酷評・批評・非議・難詰などを添えて容赦なく感想に送りつけください。

第十八話 最終回である（前書き）

ついに、最終回になった。

みなさま、本当にありがとうございます。

そして、しばらくはさようなら。

第十八話 最終回である

食堂にいた誰もが一驚を喫したが、とりわけ目を剥いたのは女将さんであった。自己の分析能力を遥かに凌駕した事態が起きた、というような顔をしていて、ぽかんと口を開けている。

董さんはずかずかと食堂に侵入すると、私の胸ぐらを掴む男に「その手を放せ、不潔頭部男」と罵倒した。「やめんか。この男たちは暴力団だぞ、挑発するんじゃない」と私は慌てたが、董さんは続けて「うに頭は海に帰れ、深じわ野郎は森に帰れ」「ダサイネクタイつけるな」「オーラがきしよい、オーラが」「いい年して暴力なんて恥ずかしくないのか」「あー、とりはだとりはだ」「臭い、おまえら臭い。臭いがついたらどうしてくれる」「ぶつとばすよ」と、これまで閉鎖空間でつちかった罵詈雑言の集大成を発揮するがごとく、董さんは言い放った。

もはや後戻りはできないと思われた。このまま、董さんも私も暴力になぶられ人生の路傍に打ち捨てられるのだ、と。しかし、ふと野高組の二人を見ると、その顔が涙に歪んでいることに気がついた。私の胸ぐらを掴んだ手がぶるぶると震えている。

私は幾重に罵倒を振りかけられた身であり平気であったが、慣れない彼らには罵詈雑言のひとつひとつが悪鬼の刃のごとく心に打ち込まれ、その凶星を的確に射る彼女の悪罵に恐慌をきたすしかなかった。やがて、男らは野高組の肩書きや面目をかなぐり捨てて「うわあん、うわあん」と泣き叫びながら食堂から走り去った。

野高組の肩書きと面目が粉々に粉碎されるさまを始終見ていた女将さんは、董さんに向かって「どうして出てきたのよ!」と歩み寄

った。しかし、董さんは冷え冷えとした顔を見ると、「もう、やめなよ」と静かに言った。

「私が出てきたんだから、カウンセラーの勝ちだ。三百万も旅館の所有権もカウンセラーのものだ。もう、こんな計画は続けられない」

女将さんは董さんの肩を掴むと、狂ったように揺さぶった。

「なんてことしてくれるの！ 董！」

しかし、董さんは妙に落ち着きはらっている。

やがて、女将さんは揺さぶるのをやめると、頭をかきむしり、血走った目で食堂を右往左往した。「私が、賭けに負けるわけが」「そんな、馬鹿なことが」と何度も繰り返し、身体を激しく揺らしながらやがて床にうずくまった。

「終わりよ、すべて台無し！」

泣き叫ぶような女将さんは呻きながら、頭を抱えている。よだれが糸を引き、髪が乱れ、まるでそれは人間が一拳に墮落していくようすを眺めているようだった。

食堂には女将さんの呻きだけが響き、私と董さんは暫時、固まっていた。

吊り上げられた魚のように床でのた打ち回る女将さんは、ひどく印象深かった。やがて耐え切れなくなった董さんが一歩踏み出して女将さんに近寄った。かがみ込むと女将さんの背中に手を回し、ひと抱きしめた。

「お母さん」

母の髪に顔をうずめた董さんは、なだめるようなやさしい声でそう言った。



眠りに落ちた女将さんを部屋に運んでベットに寝かしつけると、一息してから「私はそろそろ帰るよ」と言った。董さんには女将さんを見守るよう言ったが、どうしても見送るといっているので、二人して外に出た。

外に出ると、周囲はすっかり夜の風景にかわり、ゆるやかな夜風が武美山の脇から吹いていた。『空蘭荘』の窓からは淡い電燈の光りが漏れ、辺りの雑木林をやさしく照らしている。

「もう心配ないだろうね」

私が夜空を見上げて呟くと、董さんは「うん」と静かに返事をした。

「もう計画に私は絶対加担しないし、お母さんも懲りたと思う」

女将さんのこれまでの所業は確かに許されるべきではない。しかし、私のような取り柄のない男には女将さんが心血注いで取り組んできたカウンセラーへの思いは推し量れないし、きっと女将さんには女将さんなりの切実な思いがあったはずである。

「三百万と旅館は、これから心機一転する親子への私からのプレゼ

ントだと女将さんに伝えておいてくれ」

少し遅れて「ふふ、わかった」と返事があった。

しばらく無言で夜景を眺めたあと、私は「そろそろ行くよ」と董さんに言った。

しかし、私が芝生の上を歩き出すと、すぐに董さんに呼び止められた。

振り向くと、笑顔の彼女が電燈の灯りに照らされ立っている。

「ありがとう」

私は笑顔でうなずくと、胸のうちにその言葉をしっかりしまってから、再び歩き出した。

ごんまりとした雑木林を抜けて、軽い身体で風のようにスキップしながら、井江川に突き当たるまで進んだ。土手を駆け上り、清々しく背伸びをした。

言いようのないほどに、清々しい気持ちであった。すべてが解決したわけではなかるうが、きつと、すべてがうまくいくように思えた。

ふところから『初心者 心理学』を取り出した私は、意味不明の雄たけびを上げながら喜々として、それをびりびりに破いた。

もう、似非カウンセラーなんて、していられないぞ。しっかり働いて、しっかり生きていかなくちな。というふうに井江川に向か

って、数多の切れ端となった『初心者 心理学』をばら撒いた。夜風に舞って、秋の夜空にひらひらと飛んでいく。

そうして、紙片の舞う土手を、私は軽快に走り出した。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4194w/>

閉鎖空間と悪罵少女

2011年11月13日14時52分発行